



細川伸二 (56歳・安平志内分教会ようほく)

天理大学教授・同大柔道部師範・ロサンゼルス五輪金メダリスト



人物編
[写真・文] フォトジャーナリスト
小平尚典

No.29

人生、負けた数のほうが多い

天理柔道、三つ目のオリンピック金メダルは、細川伸二選手(60歳級)が1984年、ロサンゼルス五輪で勝ち取った。中国山脈の真ん中、兵庫県

宍粟市生まれ。大自然の中を駆け回る少年だった。体が小さかったことからいじめられ、「負けたくない、もっと強くなりなさい」と、中学生のとき柔道部へ。高校からは天理に来て、厳しい練習に無言でついていった。とにかく基本の技や乱取りなどを何度も繰り返した。

決め技は「背負い投げ」。手技に足技や腰技を組み合わせたのが自分の形に持ち込む、強い体をつくり上げた。そして成し遂げた世界学生選手権2連覇。自分を生かす道を見だし、必死で相手に向かっていけば必ず勝てるという確信をつかんだ。

せっかくなので、「手」の使い方を聞いてみた。細川さんの手技は左組みで、左手で相手の右襟を、右手で左の袖口をがっちりつかむ。両方がうまく一つにならないと、相手の力を利用して身体にならないので、その理論と身体と精神のバランスをこらえて追求したという。

心に残る一戦は、やはりロサンゼルス五輪の決勝戦だ。初めて戦った相手は、寝技になるとひっくり返って上を向き、意

表を突いてくるコーチから聞いていた。

開始30秒すぎ。相手の一瞬の隙を逃さず、力で押し込んだ。「一本」。とにかく、どうしたら相手のエネルギーを利用してやるかを、考える力が、柔道には大切だという。

1985年、世界選手権優勝後に引退。その後は郷里で教職に専念していたが、勝負の感覚が忘れられず、また復帰するに時間は置いてはだめだと感じ、ソウル五輪に再挑戦。見事に銅メダルを獲得した。

2大会連続の五輪メダリストは「柔道家人生で、実は負けた数のほうが多い。負けても、次に勝つことを意識してやるべきを大切にしている」と謙虚だ。現在、天理大学教授であり同大柔道部師範。育て上げた後進の中には、五輪3連覇の偉業を成し遂げた野村忠宏がいる。

最後に「柔道はやはり、スポーツではなく武道であるべきを忘れてはいけない。今後は、ほかのスポーツにない奥深いものを、世界に向けて発信していきたい」と抱負を語った。